

## I

5

10

15

20

25

イギリス王はギユイエンヌの封建諸侯としてフランス王の臣下の立場にあった。百年戦争はフランス王のギユイエンヌ没収宣言を機に在仏所領をめぐる王と臣下の争いに端を発し、英仏王家の婚姻関係からフランスの王位継承をめぐる争いも加わった。また、フランス国王派の諸侯と対立したブルゴーニュ公など諸侯の一部が、戦争中にイギリス王と同盟関係を結び戦争を長期化させた。こうしてフランス内の諸侯が二分し抗争した点から、百年戦争を二つの国家の戦争として捉えることは適切ではない。フランスでは、ジャンヌ・ダルクの出現に象徴されるように人びとの間に国家意識の醸成がみられ、戦争に勝利したフランス王は没落した諸侯や騎士の領地を王領に編入し、官僚制、常備軍、租税制度を整備して王権の強化を図った。結果、カレーを除いて在仏所領からイギリス王を排除し、フランスでは領土がほぼ画定されて中央集権がすすみ、絶対王政への移行が始まった。

## II

5

10

15

20

25

1960年の「アフリカの年」で多くの国家が独立し、1962年にアルジェリアも独立すると、アフリカの解放と統一をめざすパン＝アフリカ主義を背景に OAU が成立した。アフリカ南部ではアパルトヘイト政策をとる南アフリカなどイギリス系植民地と、本国の独裁政権の下で独立を認めないポルトガル植民地の白人支配地域が残存し、OAU はその解放をめざした。国際連合でも加盟国の増加でアフリカ諸国の発言力が増し、制裁が課された。Aのポルトガル植民地では独立闘争が起こり、サラザール政権から続く本国の独裁体制が革命によって崩壊すると、革命政権が独立を承認して1975年にモザンビークとして独立し、OAU に加盟した。一方、Bは、人種差別政策維持のため1965年に白人政権が一方的にローデシアとしてイギリスからの独立を宣言した。しかし、黒人解放勢力との内戦を経てイギリスの仲介により、1980年に黒人国家ジンバブエとして独立し、OAU に加盟した。

## III

5

10

15

20

25

帝政ロシアはアロー戦争に乗り、アイグン条約で黒竜江以北を、北京条約で沿海州を獲得した。さらに新疆ではイリ条約で有利な国境を画定し、三国干渉の見返りとして東清鉄道の敷設権を獲得した。また中国分割に際しては旅順・大連を租借し、義和団事件の北京議定書では北京駐屯権と賠償金を獲得した。辛亥革命により清朝が滅亡し中華民国が成立した後も、こうした中露関係は継続した。中国が軍閥割拠の状態に陥る中、ロシア革命で帝政ロシアが打倒されると、新たに成立したソヴィエト政権は、カラハン宣言で帝国主義的な権益の返還を約し国民党に歩み寄った。ワシントン会議でも租界などの権益回収が果たされず国際秩序への失望が強まる中、国家統一をめざす国民党の孫文はヨッフエとの会談を経て、コミンテルンの指導下にある共産党との提携を図った。孫文は「連ソ・容共・扶助工農」を掲げて第1次国共合作を結成し、北伐による打倒軍閥・中国統一をめざした。